

各地で話題の病害虫



ケグロキイロアザミウマの被害
鹿児島県農試 堀切正俊氏提供



ストックの萎ちよう病



ヒロヘリアオイラガ
小泉憲治氏提供



シユンギク・ベと病
福岡県病害虫防除所
杉岡敏英技師提供

ケグロキイロアザミウマ (仮称)

学名: *Thrips palmi* Karny

昭和55年5月頃、静岡県下において、これまで我が国未記録の、*Thrips palmi* Karny (静岡聖光学院工藤巖氏同定) の発生が確認された。

静岡県の調査によると、本種の発生は、中遠及び西部地区5市町村の温室メロン栽培地、約4.6haに及んでいることが判明した。その後の同定により南九州のハウス栽培や露地のキュウリ、ナス等で数年前から防除が困難であるとして問題となっていたアザミウマの一部も本種であることが確認された。また、九州のその他の地区や四国でも本種と思われるものの発生情報がある。

本種は、アザミウマ科に属し、インドネシア、インド、フィリピン、タイに広く分布している。我が国では現在、ハウス栽培のメロン、キュウリ、ナス、ピーマン、シクラメン等で被害が報じられている他、付近の雑草にも多く寄生するとの報告もある。諸外国においては、オレンジ、アボカド、茶、ソラマメ、カーネーション、シンビジウム、アブラナ属、サギソウ属、タバコ等広範囲な植物の害虫として知られている。

本種が、ハウス栽培の作物に寄生すると、葉の裏面にかすり状の食痕を生じるほか、葉緑素が抜けたように黄化し、果実では吸汁のあとが黒い斑

点として残り、肥大も悪くなる。また、新芽に集まる傾向があるため芽が伸びず、被害が激しい場合は生育不良や生育遅延をひきおこすことがある。

本種の生態については、今のところ良く解らないが、被害が我が国に普通に発生しているキイロハナアザミウマに似ていることによる混同、また作型の分化やハウス栽培作物の多様化によって、年間を通じて寄生となる作物が栽培されていること等から、全国的に発生をみている可能性があり、国内における分布の把握と被害の発生しやすい施設内における防除方法の確立が急がれる。

ストック萎ちよう病

学名: *Fusarium oxysporum*

英名: *Fusarium wilt*

千葉県安房郡千倉町のストック栽培ほ場で、3～4年位前から、萎ちよう症状を呈する病害の増加が目立ち、従来から発生のみられていた黒腐病と同様な防除を実施したところ効果が上がらなかった。このため新病害の疑いが持たれ、横浜植物防疫所調査研究部病菌課に同定依頼があった。高山技官らによって同定の結果、我が国ではストックに未記録であった *F.oxysporum* による萎ちよう病であることが確認された。その後分化型を同定するため、他の植物に対する寄生性等さらに詳細な調査が実施されている。

本病にり病すると、葉には葉脈の退緑、黄化がみられた後、しおれて、落葉する。茎は、導管部が犯されるため、内部が褐変し片側半分が萎ちようする半身萎ちよう症状を呈する。茎表面の被害部は灰色となり、白色菌糸がみられる。花も片側がしおれるため、商品価値が全くなくなる。

昨年12月、千葉県と植物防疫所合同で、現地の発生、被害状況について調査を行ったが、千倉町の他、丸山町等でも発生がみられ、露地、ハウス共に、被害の激しいほ場では80%以上の株がり病していた。現地では、本病害を従来から発生のおつた黒腐病(*Xanthomonas campestris* pv. *incanae*)と誤認していた様であるが、黒腐病は、被害部の表面に白色菌糸がみられないことや、葉脈の黄化がみられない点で区別できる。

被害の激しいほ場では、的確な農薬がないため抜き取りを行っていたが、本病は土壌伝染することから効果は上がっていない。今後、他の作物に対する被害が問題になることも考えられるため、土壌消毒を中心にした防除対策について検討する必要がある。

ヒロヘリアオイラガ

学名: *Latoia lepida* Cramer

我が国で、街路樹や、公園の樹木等の害虫といえば、アメリカシロヒトリが良く知られているが、数年前から大阪等で同様の加害をするヒロヘリアオイラガの被害が報ぜられ、昨年の夏には近畿地方で大発生した。

本虫は、東南アジア、インド、スリランカの他、アフリカの一部に分布し、我が国でも戦前、鹿児島で採集された記録がある。

近畿地方での観察結果によると年2化であり、成虫は5~6月と8~9月に出現する。越冬は、樹木等の間隙を利用し、繭内幼虫で行なう。

若令幼虫は、在来のアオイラガと異なり、集団で葉を食害する性質をもつ。寄主の範囲は、アメリカシロヒトリに似てきわめて広く、サクラ、イチヨウ、モクセイ、ケヤキ、エノキ、カエデ、サ

ザンカ、カキ、チャ等、極めて雑食性である。

終令幼虫は、体長約3cmのナマコ状で、黄緑色、背面には3本の濃い青色の線が見られる。他のイラガと同様に多数の棘を備えており、これに触れると刺され、痛みとはれを伴うことから、衛生害虫としても注目されている。

シュンギク・ベと病

学名: *Peronospora chrysanthemi-coronarii*
(Sawada) S.Ito et Tokunaga

昭和55年の、近畿・中国地域春季試験研究打合せ会において、我が国では、これまで未記録のシュンギク・ベと病の発生が広島県から報告され、その後、岡山、福岡、長崎、大分等、西南暖地の各県でも相次いで発生が確認された。

本病は、大日本菌類誌によると台湾で記録があり、寄生はシュンギクのみのものである。

我が国では、シュンギクの周年栽培を行っている地域に多発している。発生は8~10月頃、株の下葉から感染し、上葉へと移り、本葉8~12枚程度の株であれば、上部の4~5葉を除く下葉全体に及ぶようで、感染葉は枯死する。

軽微な場合は、下部の極く数葉が感染し枯死する程度であるが、被害の著しい場合は壊滅状態となり、収穫皆無の例もある。

病徴は、最初、葉の表面の一部に不整形、不明瞭な退緑色斑を生じ、これが徐々に葉全体に広がって枯死に至る。病斑部の葉裏には白色のカビ(分生子)が見られることから、ウドンコ病と誤認されやすい。

本病は、土壌伝染性で、種子による伝染は確認されていない。土壌伝染性の病気は、土壌内に潜する菌、もしくは、何らかの形で侵入した菌が、近年の施設等の普及による周年栽培、連作等で、年々増加し、これが何らかの発生要因によって発病に至るようである。

本病は、多肥栽培と多湿が、発生要因と考えられている。